

学校教育と民俗音楽文化の関係性（3）

— コダーイの人間教育観を参照して —

権藤 敦子・高橋美智子¹
(2023年10月6日受理)

Relationship between School Music and Folk Music Culture (Part 3):
Referring to Kodály's Philosophy of Human Education

Atsuko Gondo, Michiko Takahashi¹

Abstract: The purpose of this paper is to examine the discourse of Kodály, who is said to have laid the foundation of Hungarian music education based on his collection of folk music and his analysis of a vast amount of folk music. While the cultural policy of the state dictates “what is taught in music,” the relationship between the subject content of school music and the question of “why study music” is inherently deeply connected and needs to be clearly stated. Since each country has its own background, simple comparisons and the simple introduction of methods will not solve the problem. However, there is much to be learned from the uniqueness of Hungarian music education, which is based on Kodály's view of human education. It aims at the ultimate goal of “the realization of world peace for mankind” based on the historical background and is built on a solid connection between the questions “why do we teach music” and “what do we teach as music in school.”

Key words: Kodály Zoltán, music education, folklore, peace
キーワード：コダーイ・ゾルターン、音楽教育、民俗、平和

1. 問題の所在と研究の方法

近代学校教育制度とともに開始された日本の音楽科教育は、現在に至るまで約150年にわたって存続してきた。しかし、その存在基盤は脆弱であり、とりわけ、約半分の時期にあたる明治、大正、昭和前半期には他律的な教科としての性格が顕著だった。このことは日本に限ったことではなく、歴史的にも、国家体制のもとで音楽教育が文化政策の一部となり、「音楽教育が特定の音楽を社会的に維持し、また抑圧する」との指摘がされている（徳丸 2019, p. 51）。

戦前の文化政策においては、国家の必要とする音楽を「雅」とし、それ以外の音楽を「俗」とすること

により、「『雅楽』と『俗楽』の峻別」（塚原 2006, p. 110）が行われるとともに、唱歌教育の教科内容として在来の音楽は位置付かず、戦時体制下では国家主義的な文化統制に翻弄される。戦後、文化財保護法による指定制度によって雅俗の別なく伝統音楽が保護・支援の対象となるが、教科音楽は、ヨーロッパ音楽の音組織を音楽の基本とする、という方針に従って展開される。さらに、平成にはいると、教育基本法の改正等により我が国の伝統や文化の尊重が謳われ、学校教育法、学習指導要領、教科書等の内容にも反映されてきた。徳丸（2009）が指摘するように、国家体制のもとでの文化政策に教科内容が規定され、大きな影響を受けてきたのである。

他方、第二次世界大戦後の教育改革を経て、戦前までの音楽教育は一新されるが、学習指導要領のもとで策定される音楽科の教育課程では、時数削減が行われ、

¹Bölcsészettudományi Kutatóközpont Zenetudományi Intézet 外部研究員

他教科との統合が検討されるなど、音楽科の存在意義は問われ続けてきた。平成29年告示の小学校学習指導要領解説音楽編には、「教科の目標の改善」として「児童が教科としての音楽を学ぶ意味を明確にした」（文部科学省 2018, p. 6）と示されているが、「教科として学ぶ意味」にことさらに触れている教科は音楽以外には見当たらない。

前稿（権藤 2019）では今回の学習指導要領改訂において音楽科で育成を目指す資質・能力とされた「生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力」に焦点を当てるとともに、ハンガリーの音楽教育から得られる示唆について言及した。歌うことを基礎とし、学校の授業を通して音楽がすべての人のものとなることを目指し、民俗音楽から普遍的な芸術音楽までの音楽教材を精選し、教師によりすぐれた実践の工夫が積み重ねられてきたハンガリーの音楽教育の実践については、これまでも多くの先行研究で考察されてきている。しかし、その根底には、戦乱の続く時代を乗り越え、歴史的な状況に立ち向かい、世界人類の平和を希求しながら自らのアイデンティティを音楽教育の視点から確立してきたコダーイ・ゾルターン Kodály Zoltán (1882-1967) の、「世界人類の平和への実現」を根本理念とする音楽教育哲学が存在する（高橋 2013, p. 75）。すぐれた実践が生み出されてきた背景には、ハンガリーにおける独自の歴史観、次代への責任への自覚、コダーイを中心として行われた徹底的な調査・研究の成果、その成果に基づく教育実践の開発がある。いわば徹底して「教科等の本質」が明らかにされ、ハンガリーのみならず人類の音楽文化のこれからの発展まで見据え、人間教育の究極目標のもとで音楽科のあり方が構築されてきたのである。

国家による文化政策により「音楽科で何を教えるのか」が規定される中で、音楽科の教科内容と「なぜ音楽科を学ぶのか」という問いとの関係は本来深い結びつきをもっており、明確に示される必要がある。本稿では、膨大な民俗音楽の蒐集・採譜・分析に基づき、ハンガリー民俗音楽を根底に置く音楽教育の基礎を築いたとされるコダーイについて、平和を希求する音楽教育と民俗音楽との接点についての言説を検討することを目的とする。コダーイ自身の発言・論考を対象とし、ハンガリー音楽学 (Magyar Zenetudomány) 7, Zeneműkiadó 社刊となる *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*。（回顧録: 著作集, スピーチ, 声明）の第1巻 (1964a) と第2巻 (1964b), 同じく Zeneműkiadó 社刊となる *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*。（回顧録: 遺作, スピーチ, 声明）の第3巻 (1989), Argumentum 社刊とな

る第3巻増補版 (2007) を中心に参照、可能な範囲で初出の年を示した。和訳は高橋による。

なお、*Visszatekintés* (1964a・1964b) 所収の論考は、羽仁協子 (1968.6-1969.9), 中川弘一郎 (1980) により日本に一部紹介されているが、ここでは2007版までの原著4巻からテーマを限定して新たに訳出、考察した。

2. コダーイの視点から見た歴史的経緯

ここでは、まず、コダーイの記述に基づくハンガリー文化史について整理する。

1964年の ISME (International Society for Music Education) ブダペスト大会の開催挨拶で、コダーイは「ハンガリーは9世紀ごろまだ、遊牧民族であり、優秀な君主たちに先導され、短期間で文化が繁栄した。マーチャーシュ王 (統治1458-1490) は、莫大な蔵書をもつ図書館と聖歌隊を有し、そしてその軍隊の卓越性は広く知られていた」(Kodály 1964ab/1989, pp. 123-124) とハンガリーのルネサンス文化の興隆期について述べている。1965年のハンブルクの北ドイツ放送局でのインタビューにおいても、マーチャーシュ王がハンガリー文化の発展に寄与したことを詳細に説明し、ドイツの優れた音楽家であるトマス・シュトルツァー Thomas Stoltzer (c.1480-1526) がブダで合唱団を指揮していたこと、ゲーテンベルクによる印刷機が導入されたこと、ルネサンス文化がマーチャーシュ王の宮廷で高い水準にまで達したことに触れている (Kodály 1965/ 1989, p. 585)。

しかし、マーチャーシュ王制時代に開花したハンガリー文化は、オスマン帝国の占領 (1526) 以降、その状況が激変した。すなわち、オスマン帝国の占領で大国ハンガリーは3つに分けられ、お互いに交流することさえできなくなった。さらに、文化はすべてにおいて途絶えることとなったのである。コダーイはその時代について、「オスマン帝国に占領され、戦争が終わる頃には西洋との文化的な繋がりを失ってしまった。その後、ドイツの音楽がハンガリーに導入され、さらにハンガリーの作曲家たちはドイツ語で考えようとし、いわば、一種の人為的な文化が生まれた」(Kodály 1947/1989, p. 471) と述べている。

もともと未分化だった社会は階層化していった。(中略) 文化は、徐々に、目に見えて、異文化に取って変わられていった。『ハンガリーの行為 *Gesta Hungarorum*』にもあるように、人々は自国の伝統を軽蔑するようになった。さらに、絶え間ない戦

争によって、移民は上層部だけでなく中層部や下層部にも広がり、19世紀には多国籍の人々がハンガリーに多く住むようになった。その状況は、単一言語の国の人にとっては理解しがたいであろう。(Kodály 1941a/1989, p.261)

しかも、オスマン帝国撤退後、ハプスブルク帝国の絶対主義の支配となり、それに反対したラーコーツィ独立戦争(1703-1711)、そして、その100年後には1848から1849年にかけてハンガリー自由戦争(ハンガリー革命)が続いた。この戦争もまた悲惨な結末をもたらしたが、その後、国がある程度復興した頃に、今度は世界大戦が勃発した(Gráz 2006, p. 292, p. 406)。「1849年の自由戦争は悲劇的な敗戦となり、わずか50年前に始まった素晴らしい改革時代の成果があったにもかかわらず、ほとんどが破壊されてしまった。そして2度の世界大戦の間に再建されたものも破壊されてしまった」(Kodály 1965/1989, p. 585)、「我が国は、(第一次世界大戦の敗戦において)領土と人口の3分の2を失い、私の教え子たちの多くは世界各国に離散した」(Kodály 1963a/1989, p. 530)、「次に第二次世界大戦、すべてが根底から覆されてしまうような『戦争』が起こった。こうした絶え間ない戦争の結果、私たちは400年もの間、物理的かつ精神的な破滅の中で生きてきた。ブダペストにはまだ多くの廃墟が残されている。また、精神的な痕跡もその一つである」(Kodály 1964a/1989, p. 123)とコダーイは述べている。

在来の文化が破壊され、異文化が持ち込まれ、多国籍の人々が流入する中で、とりわけ音楽文化への影響は深刻だった。「二つの世界大戦は平和な間に再建されたほとんどすべてを破壊してしまい、4世紀にわたる戦争で音楽ほど深刻な被害に見舞われた文化分野はない」(Kodály 1964b/1989, p. 124)とコダーイは言う。また、「戦争、と聞いて、良識ある人なら誰もが抱くような憎悪や嫌悪以上に、音楽家は何を語るができるだろう。芸術、学問がすべてそうであるように、音楽は武器の生み出すノイズとはかけ離れたところにある。なぜなら、あらゆる戦争は、経済、道徳、文化いずれの領域においても、人類の発展を何十年も前の状態に後退させてしまうからである」(Kodály 1950/1989, p. 72)とも述べている。

1965年ハンブルグのテレビ局でのインタビューでは、「外国からの波はハンガリー独自の文化を席卷し、ハンガリーの音楽の伝統は次第に都市から姿を消していった。新しい戦争が始まるたび、文化の再興のために外国からの援助が求められた。多くの外国人、主に

ドイツ人とイタリア人がこの国にやってきて、自国の文化を人々に浸透させようとした。自国の伝統はますます村落に追いやられ、教育を受けていない人々に埋もれていった。教育を受けた人々は、外国語を学び、外国の文化を取り入れた。そのため古代ハンガリー伝統文化の痕跡は、村でしか見つけられなかった」と述べている(Kodály 1965/1989, p. 585)。

このように、コダーイの視点から見た歴史的経緯では、ハンガリーでは古くから伝わる伝統的な音楽文化が独自の展開を見せながらも、繰り返される戦争による暴力的な破壊により廃墟となり、傷つき、外来の文化に取って代わられてきた歴史が語られる。そうした時代背景を踏まえ、さらには激動の時代を生きるなかで、ハンガリーの文化をどう復興していくのか、コダーイは真剣な問いかけを繰り返している。

3. コダーイの主張する音楽の価値と音楽教育

歴史的自覚と世界平和への責任を意識していたコダーイは、音楽の価値を論じ、その価値を踏まえつつ音楽教育の必要性を指摘する。第二次世界大戦中の1944年、ジャーナル誌 *Éneklő Ifjúság* に掲載された論考「何のための音楽サークルか」では、人間の精神と音楽との関係について「音楽の目指すものは、それを批判することではなく、それを栄養とすることである。音楽は精神的な栄養であり、他の何ものにも代えられない。音楽を糧としない者は精神の貧しい中で生き、そして死ぬ。音楽なしに完全な精神生活はありえない」(Kodály 1966b/1989, p. 154)と断言している。また、1964-66年のプレーメンのラジオ局での対談では、音楽の価値について、「音楽は、他の芸術にはない方法で、常に人間の魂のある領域に魅力を与える。そして、そのことが音楽の価値を永遠に確かなものにしていく」(Kodály 1964-1966/1989, p. 570)と述べている。

このような音楽観を踏まえた教育との関係について、「これまでのところ、肉体と精神の調和のとれた教育において最高の成果を達成したのは古代ギリシアの教育であった」(Kodály 1956/1964a, p. 306)とコダーイは述べ、そこでは音楽が人間教育の一科として重要な部分となっていたことにふれている(Kodály 1966a/1989, p. 192)。古代ギリシアの哲学者プラトンの音楽観に言及し、「リズムと旋律は魂に最も深く浸透するからこそ、音楽教育は極めて重要であり、そして、正しい秩序と原則に従って育てられた人を、調和のとれた心を持った人間にするのである」(Kodály 1946a/1964a, p. 182)とも述べている。

また、人間教育に音楽の必要性を唱えた17世紀のチェコの教育学者コメニウスの名前を挙げ、「古代ギリシアからコメニウスまで、音楽は人間教育に必要不可欠であるという理念が生きている」(Kodály 1961/1964a, p. 334)とし、さらに18世紀のフランスの哲学者、ジャン=ジャック・ルソーの「音楽はあらゆる芸術の中で、最も語彙が豊富であり、それゆえに事典が最も必要とされる」という言葉にも言及している(Kodály 1966b/1989, p. 155)。

さらに、コダーイに大きな影響を与えたのは、チャールズ・パーシー・スノー Charles Percy Snow の1959年の講演「二つの文化と科学革命 *The Two Cultures and Scientific Revolution.*」と、スノーとの直接の出会いである。コダーイは、スノーの音楽への考えを次のようにまとめている。「彼は今日の文化における分裂を指摘している。人々の半分は教養人であっても自然科学の知識がなく、残りの半分の人々は文学や芸術を鑑賞できない。彼はこの分裂を悲惨なものとしており、それを埋める方法を考えている。そして、この相容れない異質な2つの要素が出会うことのできる唯一の分野が音楽であると補足している」(Kodály 1964c/1989, p. 120)。

以上のように、コダーイは、古代ギリシア以来の人間の叡智を引用しながら、「音楽は多様な文化をもつ人々の出会いの場である。それは、音楽が人間の魂の表現手段であり、他の文化に専心していても、あらゆる人が同等に享受できるものだからである」(Kodály 1964c/1989, p. 120)と、彼自身の見解を表明している。そして、こうした音楽の価値の認識に基づき、音楽教育の必要性を主張する中で、「音楽はすべての人のためのものに！だが、どうすれば実現できるだろうか」(Kodály 1952a/1964a, p. 5)と思索を重ねながら、コダーイはそのあり方についていくつもの提言を残している。

たとえば、1930年のインタビュー (*Budapesti Hírlap* ブダペスト新聞掲載)では、「この国には、音楽的な教養をもった人たちが、十分ではないにせよ、たくさんいる。しかし、彼らは概してハンガリー魂を表わす音楽を熱心に求めようとしない。ハンガリーにおいて高等な教育を受けた人たちは、生活の中でハンガリーの音楽文化と関わらなかつた。高度な音楽文化を担う人材や教育機関をつくり出したとしても、それらは上から築かれたものであり、聴衆を育てることを見落としていたところに根本的な問題があったからである。最も優先すべき課題は、可能な限り幅広い層の人々に、特に学校において容易に音楽的教養を身につけるための手段を得られるようにすることである」

(Kodály 1930/1989, p. 27)と述べている。

1937年の「地方都市における音楽生活」についての講演では、「若者の大部分は、音楽的に不毛な環境で育った。私たちは、50年にわたる誤った文化政策の埋め合わせをしなければならない。エリート教育と大衆教育は切り離すことのできない一体化されたものでなければならない。そして両者の間での釣り合いが取れて初めてそれが価値のあるものになる、ということは、今やすべての人にとって明らかである。このバランスを回復するために、最も緊急な課題は、学校における音楽教育を改善すること、いやむしろ学校を創造することである」(Kodály 1937/1964a, p. 73)と述べており、すべての人に文化を取り戻すこと、そのために学校教育の改革をすることが重要である、と訴えている。

1940年代には、階級や階層にかかわらず、若者が音楽を愛し、音楽的な教養を身に付けるための大規模な計画として、「歌う若者」運動に取り組んでおり、インタビューで「私たちの目的は、若者の音楽への無関心をなくし、新しい世代がハンガリーの民俗意識を音楽で表現できるようにすることである。これが根本的なことである」と語っている(Kodály 1941/1964a, p. 90)。しかし、この運動に手応えを感じながらも、「第二次世界大戦によって跡形もなく打ち壊されてしまった。すべてを最初からやり直さなければならなかつた。唯一の解決策は、すべての学校において音楽科を必修科目にすることである、と確信した」(Kodály 1966c/1989, p. 219)と振り返る。

1950年に創設、開校されたケチケメートの歌・音楽小学校 *Kecskeméti Ének・Zenei Általános Iskola* で最初の8年生が卒業した1958年に、コダーイは「ハンガリーの音楽を聴き、音楽を愛する国民が、その有能な専門知識、準備、そして魂の全能力をもって、人間の天賦の才の最も美しい創造物のひとつである音楽を授かることができるように」(Kodály 1958/2007, p. 690)との式辞を子どもたちに贈った。また、1964年のケチケメート歌・音楽普通小学校の新校舎の落成式では、次のように民衆のための学校であること、人間として豊かさを授けられることをコダーイは強調している。

この学校は音楽学校として創設されたわけではない。一般的な人間教育の中に音楽を組織立てて一体化させた初めての学校である。ここでは、他の小学校と同じようにすべてのことが教えられ、さらにすばらしい特徴がある。音楽で人生をスタートさせた人は、その後のすべての活動を豊かなものにする、ということを経験して教わるのである。多くの困難を

乗り越えるための、人生の宝物を得ることができ
る。(中略)この礎石の上に新しいハンガリーの国
民文化が一日も早く築かれ、すべてのハンガリー人
を結集し、よりよい幸せな未来に向かって不撓不屈
の精神で推し進めていくことを要望する。(Kodály
1964c/1989, p. 121)

どんなに異なる教養分野の人々でも、音楽とつな
がっている。その理由は、異なる分野に専念してい
ても、人間の魂の表現の手段である音楽は、すべて
の人に等しく享受されることが明らかだからである。
そして、実際、文化の歴史を見ると、古代ギリシ
アの人々がそうであったように、ルネサンスがそう
であったように、そして極東の中国文化、日本文化
、インド文化がそうであったように、音楽はあらゆる
文化の頂点に位置付けられていた。文化が衰退
し、黄金時代が終わりを告げようとしているとき、
音楽はこの主導的地位から外される。しかし、どん
な教育も、どんな文化も、音楽なしには成り立たな
いということは、誰もが確信していることだと思う。
そのために、私たちは一般の人々が音楽を共通の宝
と感じられるよう、最大限の努力をしなければなら
ない。(Kodály 1964c/1989, p. 120)

音楽の価値と教育の必要性に対して高い意識を抱い
ていたコダーイは、二つの大戦の後、音楽教育の道
を中心に据えることにした、と1965年のハンブルク北ド
イツ放送でのインタビューで述べている。「祖国の文
化に貢献するために、私は音楽以外の多くのことに取
り組まなければならなかった。だが、何よりもまず、
私はすべての音楽教育を一新することを考えた。個
人のための仕事ではなく、同僚や後継者を育てるた
めの責務があった。そのため、私は教育者としての仕
事を全うする必要があった」(Kodály 1963a/1989, p.
529)。

また、1966年ハンガリーの dunapataj 村の文化セン
ター落成式では、ハンガリー音楽文化の復活を提唱
し、音楽教育に向かう決意について次のように述べて
いる。

400年もの間、廃墟を修復することしかしていない。
なぜなら、何かをつくってもすぐにまた取り壊し
て、結局構築物はまた廃棄物になってしまうからで
ある。1945年、これは最後の戦争であり、廃墟を
復元し、永遠に遺していくことに価値があると私は
思った。そして、それ以降、音楽教育という一見狭
いようでかなり重要な分野で、自分たちがこれまで

やってこなかったことをやりたいという思いがますます
強くなった。(Kodály 1966d/1989, p. 221)

4. コダーイの世界人類の平和の実現 への信念表明

第二次世界大戦後の1951年4月2日、芸術家・作家
によるブダペスト平和会議において、コダーイは「平
和について」と題して、「芸術家の間では戦争反対を
唱和するのはドナウ川に水を注ぐようなものである。
つまり、平和というのは音楽家の存在にとって根源
的なことである」と述べている (Kodály 1951/1964a,
p. 223)。また、翌1952年11月23日には、ハンガリー
平和大会において、コダーイ作曲ヴェレシュ・シャー
ンドル Weöres Sándor 作詞による「平和の歌」を見
童合唱団が歌唱した後、コダーイはその演説におい
て「私たち音楽家は音楽言語で真意を提唱する。すべ
てのすぐれた音楽は全世界の調和を表す。そして、も
し、言葉で唱えなくても、まったく歌詞がなくても、
すぐれた音楽は平和の希求を表現している」(Kodály
1952b/1964a, p. 257)と表明した。

コダーイの平和についての言明の背景には、ここま
でに概観したように、約400年もの廃墟の時代、破壊
の時代を経たハンガリー文化の歴史的経緯の自覚が存
在する。そして、ハンガリーの文化を復興するため
には、音楽がすべての人のためのものとなるよう音楽
教育の改革を行うことが重要である、とコダーイは自身
の論考、演説、インタビューでしばしば語ってきた。
さらに、平和は音楽家の存在にとって根源的なこと
である、と述べたように、「世界人類の平和への実現」
という人間教育の究極目的がコダーイの音楽教育哲学
の根本理念であることに改めて意識を向ける必要がある。

第二次世界大戦から約20年間にハンガリーの音楽
教育はめざましい発展を遂げた。1964年6月26日から
7月3日まで開催された第6回 ISME ブダペスト大
会には、30カ国、およそ350名もの参加者が訪れ、保
育園・幼稚園から高校の授業のデモンストレーション、
そして音楽専門学校、大学での合唱演奏や器楽演奏を
含むハンガリーの音楽教育の様々な実践が公開され
た。ISMEの名誉会長であるコダーイは、世界各国の
教育関係者たちに、自身が直接に英語とフランス語で、
ドイツ語とロシア語は弟子のアーダム・イエヌー
Ádám Jenő が代読して、開催挨拶の結びのことばと
して、世界人類の平和実現への信念を贈ったのである
(Bónis 1964/1989, p. 613)。英語版では、「我々の過去
18年間にわたる努力のささやかな成果をご覧いただく

ことができます。そして、目的達成に適したどんなことでも皆様から御教示いただくことができれば光栄に思います。私たちは、お互いの共同研究によって、全人類にとってよりよい幸せな人生への道を実現できると心から確信しています。この信念は私たちの将来の闘いに力と不屈の精神を与えてくれることでしょう。次回の会合では各国の代表者が新しい、そして成果ある進展を報告し、人類の普遍的な友愛と幸福に向けて、さらなる歩みを踏み出していけるものと信じています」(Kodály 1964a/1989, p. 123) と述べている。

フランス語版では、「私たちは、音楽をより親しみのあるもの、人類共通の宝とするために、全身全霊で取り組まなければなりません。私たちの努力のささやかな成果をお見せする一方で、私たちの教育をよりよいものにするために、皆さんからあらゆることを学びたいと思います。私たちは、音楽をより親しみあるものにし、人々のよりよい幸せな生活を実現できると確信しています。この信念が、私たちを待ち受ける避けられない闘いに立ち向かう力と忍耐力を与えてくれ、そして、この会議が楽しく実り多いものとなることを望んでいます。さらに、今回の会議において、各国の代表団が新たな喜ばしい進展を報告し、私たちが人類の兄弟に近づくことを願っています、私たちは、100回以上にわたって新たに仕事をやり直す運命にあります。しかし、この仕事を継続できることを心から望んでいます。そして、私たちはこの大会での助言と援助に対して心から敬意を表します」(Kodály 1964b/1989, p. 124) と表明した。

英語とフランス語の内容は多少の違いはあるが、コダーイの挨拶は「音楽を人類共通の宝」と捉え、人類の兄弟とともに音楽教育をさらなる高みへと発展させ、人類の平和の実現へと向かう志操堅固の精神を世界の人々に喚起するものだった。こうしたコダーイの提言は、1982年の日本での生誕100周年記念行事のアツェール・ジュルジ Aczér György¹⁾ の「コダーイのメッセージ」という次の挨拶文を振り返っても、ハンガリーでは深く理解されていることなのではないか、と考えられる。

芸術的形象化を経た歴史的自覚、世界に対する責任—これがコダーイが残していったメッセージの核心であると信じます。(中略) この日々、平和を脅かされている地球上にあって、諸民族の理解は音楽の仲介によっても助けられなければなりません。民族と音楽が会おうべきである、ということをコダーイは、どう考えていたのでしょうか。同じ音楽がほかでも聞かれ、愛され、うたわれていることを知るもの

は、それだけ武器をとるものをためらうのだ—生前にこう言ったことがあります。(アツェール 1982, 頁数なし)

生前のコダーイを知るアツェールが、「平和を脅かされている地球上にあって」と述べつつ「歴史的自覚と世界に対する責任」こそ「コダーイが残していったメッセージの核心である」と書いていることは、平和が脅かされ、危機にさらされている現代において改めて生々しく響く。しかし、1982年に東京で開催されたコダーイの演奏会の催しにおいて、この言葉に注目した日本人がどれだけいたのだろうか。

5. 音楽教育と民俗文化との関係性

第二次世界大戦時、ドイツ軍がポーランドに侵攻した1939年、コダーイは「音楽におけるハンガリー人の心と精神と意識(魂)」の著述において、ハンガリー文化の課題と平和を達成するための改善への道として、「民俗の文化が、独自の法則に従ってヨーロッパから必要なものだけを受容し、組織的に取り込みながら高尚な文化へと成長することによってのみ、平和は成し遂げられる」(Kodály 1939/1964b, p. 260) と記している。すでに触れた、平和への願いとハンガリーの文化における民俗文化の重要性を改めて指摘していることがわかる。そこで示されたのは偏狭な自文化至上主義ではなく、それぞれの国が自文化を自律的に発展させることが世界の平和の実現につながる、という信念の表明である。音楽の価値を深く捉え、その音楽をすべての人のものにするこそが人類の平和の実現、究極的な人間教育の目的を達成につながる、と考えたコダーイの根本理念に基づく教材は、唱えことばやわらべうた遊びなど、ハンガリーの民俗音楽文化に根ざした教材が位置付き、そこを出発点として普遍的な人類共通の宝である音楽文化の発展へと導く。

1963年、コペンハーゲンで開催されたコンセルヴァトワールの音楽院長の会議での演説では、過去の音楽文化の問題点について「過去のハンガリーの音楽文化は3つに分断されていた。1. 最も少数であったクラシック音楽の愛好家や演奏家。2. ジブシーが演奏する民謡風の楽曲だけを知っていて、それをもとに教わった人々。3. 農民層、古い民謡の唯一の宝庫の保持者」(Kodály 1963b/1989, p. 115) である、とコダーイは指摘している。そして、この上記の3つのグループをまとめることが急務である、としている。

また、バルトークの音楽作品が生存中にハンガリーにおいて普及しなかった理由と、芸術音楽の理解力を

高める必要性について、1946年3月25日のバルトーク
 生誕65周年記念祭の演説で次のように説明している。

最初の子供の作品からピアノ学校、ヴァイオリンの
 二重奏曲から「マイクロコスモス」まで、多種多様な
 小さな傑作がある。もしこれらすべてがハンガリー
 の教育機関の血流に入っていたら、今日の聴衆は異
 なっていただろうし、バルトークの主要な作品が軽
 視される運命をたどることもなかっただろう。ピア
 ノの先生たちは何十年の間、バルトークを無視し
 てきた。というも、言うまでもなく、バルトーク
 の作品はハンガリーや近隣の民俗音楽に基づくもの
 であり、その知識なしにはほとんど理解できない。
 (Kodály 1946a/1964b, p. 448)

そして、バルトークの音楽作品が受け入れられてい
 なかったのは、ハンガリーにおいて完全な人間教育
 がなされていなかったことが起因している、として、
 1955年9月26日の「バルトーク没後10周年に寄せて」
 のインタビューで次のように述べている。

(バルトークの) 死後10年経ったが、かつてないほ
 ど生き続けている。彼自身もはや作品を広めること
 はできなかったが、生前に比べて普及している。世
 界中のコンサート・シリーズを見ても彼の名前がな

いことはほとんどない。レコード会社のカタログを
 めくってみても、彼のひとつの作品が4、5種類の
 録音で収録されている。彼に関する本は外国語で出
 版されている。それは私たちに何を意味しているか。
 バルトークが取り上げられたり、言及されたりする
 ことはすべて、ハンガリーを意味する。世界の人々
 は、彼の芸術がこの土壌に根ざしていること、そし
 て、彼が意識的にせよ無意識にせよ、この国、この
 国民をこの音楽芸術で描いていることを理解するよ
 うになる。(Kodály 1955/1964b, p. 469)

このように、コダーイの描く教育課程では、第一に、
 自国ハンガリーのわらべうたあそびやとなえことばあ
 そびなどの伝承あそびから、ハンガリー民謡、民俗器
 楽音楽、民俗ダンスなどの民俗音楽へ、そして、ハン
 ガリー民俗音楽の様式の創作音楽、さらに、ハンガリー
 と近似の国の民俗音楽、世界の民俗音楽、そして、世
 界の最高峰の芸術音楽を教材として精選している。そ
 こには、音楽がすべての人のものになるように、音楽
 の理解力や審美眼を発達させ、聴衆と芸術家を育み、
 真のハンガリー音楽文化の発展と世界各国の協調的な
 音楽研究を通して、完全な調和ある人間形成へと導き、
 「人間がより人間らしく成長するために、自国の民俗
 芸術を基盤にした哲学」(権藤、高橋、Fügedi 2014, p.
 31)、ひいては人間教育の究極的な目的である、世界

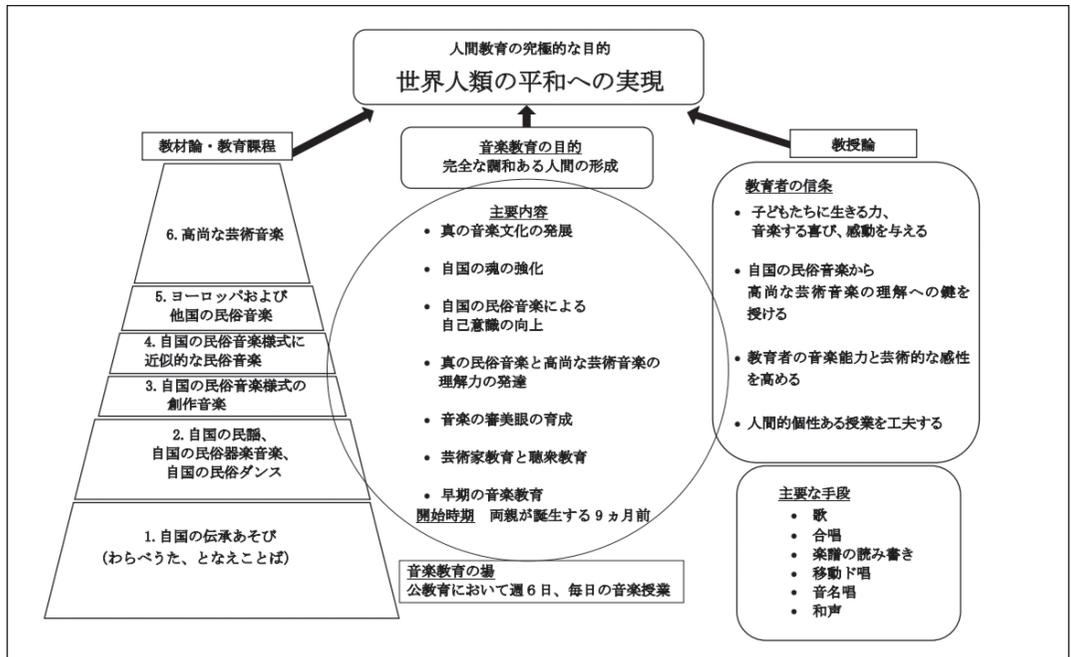


図1 コダーイ・ゾルターンの総合的な音楽教育哲学の体系 (高橋作図) * (高橋2013, p.76) の2023改訂版

人類の平和を実現する、という構想が存在した。その概要を図1に示す²⁾。

6. 考察

本稿では、世界人類の平和の実現を人間教育の究極的な目的とし、音楽教育において、自文化を根底に置きながら芸術音楽への理解へと教育課程を構築したコダーイの言説を考察し、コダーイの視点による歴史的経緯をたどり、音楽の価値と音楽教育への言及を踏まえながら、世界の平和の実現を希求する信念を確認し、そこにおいて、民俗音楽と音楽教育の関係がどのように捉えられてきたのかを明らかにしてきた。

「学校での音楽教育は、それぞれの国民に自分たちの“音楽の母国語”を紹介することによって、独自の民俗音楽の伝統を国民のアイデンティティの現れとして賞賛することから始められるべきだという教訓があるが、それはブルターン・コダーイの教育の概念の基礎となる柱として、今日では議論の余地なく世界中の音楽教育者から認識されている」(エルディ 2002, p. 5)とあるように、ハンガリー、そして国際的にもコダーイの教育理念は現在広く知られている。もちろん、それぞれの国には独自の背景が存在し、単純に比較したり安易に方法を導入したりしても、問題の解決にはつながらない。しかし、歴史的経緯を踏まえて「世界人類の平和の実現」という究極目的を目指すコダーイの人間教育観を根底とし、「なぜ音楽を教えるのか」と「音楽科で何を教えるのか」という問いが確かに結びついて構築されているハンガリーの音楽教育の独自性から学ぶところは多い。

コダーイは今から50年前に、その音楽教育の考え方の根本を考えだし、主張しはじめたのですが、当時のハンガリーの社会によってさして支持されず、それを応用しようとする人も数人の個人(コダーイの直接の弟子たち)に限られていたのはなぜでしょうか。それは、コダーイの考え方が、当時、あまりに革命的であったからにちがひありません。しかし、今日、民族の進歩的伝統の活用、人格の全面発達、全ての人が教養に参与する権利、芸術を共有財産としてとらえること、すべての人の幼年期を重視すること、集団感覚を発達させること、経験と行為をとおしての能動的な知識提供など、コダーイの方法論を支えている理念的なものいづれをとっても、現在、国際的に教育学がそちらの方向に新しいよみがありを求めている考え方であることがわかります。(フォライ 1971/1975, p. 33)

コダーイの弟子であったフォライ・カタリンが書いているように、コダーイの音楽教育の考え方が最初から支持されていたわけではない。しかし、1964年にブダペストで開催された ISME 大会におけるコダーイの発言や音楽教育実践が象徴的に表しているように、コダーイの根本理念に基づく音楽教育は、単なる音楽指導の方法論としてではなく、「人格の全面発達」「民族の進歩的伝統の活用」、さらには「世界人類の平和」という、コダーイの人間教育観に基づく体系としてハンガリーで実現されてきた。そのことは、「(ナショナリズムは)民族文化の伝統に反している」「文化は昔の人民に対しての尊敬からつくられます」「芸術と科学は敬意を表して残していくもので、中に憎しみや戦争が含まれないように、そしてよいものを無くさないように気をつけなければなりません」(岩井 1991, p. 99)とフォライが語っているように、他国を否定する偏狭なナショナリズムと結びつく自文化至上主義ではなく、そこを出発点にして、それぞれの文化を尊重し、さらには「音楽を人類共通の宝」として位置付けるものだった³⁾。

イツェーシュ・ミハイ Ittész Mihály (2002, p. 268)も、多文化を視野に入れたコダーイの見解として、(1) 自文化を中心とした音楽教育を、他の文化の価値ある音楽への扉を開くものとして思い描いていたこと、(2) 異なる文化との共通点を見出すことで教えるプロセスはよりわかりやすくなること、(3) 音楽を知り、他の国の文化を知ることによって、相互に理解し合い、相手を正当に認めて寛容に受け入れるようになること、そしてこれらすべてが、世界の音楽を理解することに寄与すること、の3点を挙げている。コダーイのメッセージの核心にあるのは、芸術的形象化を経た歴史的自覚、世界に対する責任であるとアツェールが指摘したように、人間教育の究極の目的に照らして民俗音楽文化と音楽教育の関係性を構想し、実践へと結びつけてきたコダーイのコンセプトが広く共有され、実現されてきたことがわかる。

「音楽科で何を教えるのか」と、「なぜ音楽科を学ぶのか」という2つの問いをつなぐためには、日本の音楽文化の歴史の独自性(権藤2015, pp. 213-216)を踏まえつつ、何よりもまず自らの文化を解き明かし、「教科等の本質」を実践へとつなげるとともに、そこから他の文化を知り、共通点を手がかりにしてそのよさを味わい、相手を受け入れ、理解し合う、音楽が子どもたちみんなのものになるような授業の工夫を行う一、そうした方向性を模索しながら、検討していくことが必要ではないかと考えられる。

【注】

- ¹⁾ アツェールは、1980-82年当時は国民公共文化評議会会長。ハンガリーテレビ局アーカイブ (MTVA Archivum) 掲載の1962年12月16日コダーイの誕生日祝賀パーティでの写真では、コダーイの右隣に着席している。(2023/9/23最終閲覧)
<https://archivum.mtva.hu/photobank/item/MTI-FOTO-NFZBRWp5QmxoMDBNOENTNGhnQ0xv dz09>
- ²⁾ 高橋作成。初出は高橋 (2013, p. 76)。2014年8月9日に甲南女子大学で行われた日本コダーイ協会全国大会における、高橋による基調講演「音楽はみんなのために—その原点—」配布資料に改訂版を掲載。資料1は本稿執筆にあたり2014年の図をさらに改訂した図である。
- ³⁾ イツェーシュも、コダーイは nationalist (国粋主義者) でも chauvinist (狂信的愛国者) でもなく、patriot (愛国の志士) である、と区別している (Ittzés 2002, p. 260)。

【引用文献】

- Bónis, F. (1964). Jegyzetek. In Kodály, Z. (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3. Bónis, F. (Ed.), (pp. 601-676). Budapest: Zeneműkiadó.
- Glatz, F. (Ed). (2006). *A magyarok krónikája* (4th corrected ed.) Budapest: Helikon Alexandra.
- Ittzés, M. (2002). *Zoltán Kodály, in Retrospect: On the border of East and West*. Kecskemét: Kodály Institute.
- Kodály, Z. (1906). Magyar népdal In Bónis, F. (Ed.), (1964a), *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 1 (pp. 9-10). Budapest: Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1930). Igaz-e, hogy a magyar kultúrát a középosztály hordja a vállán? In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (p. 27). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1937). Vidéki város zeneélete. In Bónis, F. (Ed.), (1964a). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 1 (p. 71-74). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1939). Magyarság a zenében. In Bónis, F. (Ed.), (1964b). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 2 (pp.235-260). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1941a). Népzene és műzene. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 2 (pp. 261-267).

- Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1941b). Nyilatkozat a “Fiatalok” című lapban. In Bónis, F. (Ed.), (1964a). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 1 (pp. 90-91). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1946a). Bartók és a magyar ifjúság. In Bónis, F. (Ed.), (1964b). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 2 (pp.447-449). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1946b). A vigadó hangversenyterme. In Bónis, F. (Ed.), (1964a). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 1 (p.182). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1947). Bartókról és a magyar zenéről. In Bónis, F. (Ed.). (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp. 471-473). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1950). A magyar békekongresszuson. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp. 72-73). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1951). Békeről. In Bónis, F. (Ed.), (1964a). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 1 (pp. 223-224). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1952a) Legyen a zene mindenkié. In. Bónis, F. (Ed.), (1964a). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 2 (p. 7). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1952b). Békekongresszusi Felszólalás. In Bónis, F. (Ed.), (1964a). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 1 (p. 257). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1955). Bartók halálának tizedik évfordulóján. In Bónis, F. (Ed.), (1964b). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 2 (pp.469-470). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1956). Tanügyi bácsik! Endejétek énekelni a gyermekeket!. In Bónis, F. (Ed.), (1964a). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 1 (pp. 304-308). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1958). A kecskeméti Énekes Iskola első ballagási ünnepségén In Bónis, F. (Ed.), (2007). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (p. 690). Budapest: Argumentum.
- Kodály, Z. (1961). Még néhány szó a tantervről. In Bónis, F. (Ed.), (1964a). *Visszatekintés: Összetett írások, beszédek, nyilatkozatok*, 1 (pp. 334-335). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1963a). Emlék. In Bónis, F. (Ed.), (1989).

- Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp. 526-531). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1963b) A konyervatóriumi igazgatók koppenhágai tanácskozásán. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp. 114-118). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1964a). A zenei nevelők nemzetközi társaságának Budapesti konferenciáján: A megnyitó beszéd angol változata. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (p.123). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1964b). A zenei nevelők nemzetközi társaságának budapesti konferenciáján: A megnyitó beszéd francia változata. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (p.124). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1964c). A kecskeméti Ének-zenei Általános Iskola új épületének felavatásán. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp.119-121). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1964d). A kecskeméti Énekes Iskola első ballagási ünnepségén In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp.119-121). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1964-66). Utam a zenéhez: Öt beszélgetés Lutz besch-sel. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp. 537-572). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1965). Önarckép. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp. 584-589). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1966a) A zenei nevelők Santa Barbara-i konferenciája előtt. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp.192-196). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1966b). A Jeunesses Musicals párizsi kongresszusán. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp.154-157). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1966c). Zenetanítás és nevelés. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp. 219-220). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1966d). A dunapataji művelődési ház avatásán. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (pp. 221-222). Zeneműkiadó.
- Kodály, Z. (1966e). A dunapataji művelődési ház avatásán. In Kodály, Z. (1967). Kecskeméti kapcsolatok. In Bónis, F. (Ed.), (1989). *Visszatekintés: Hátrahagyott írások, beszédek, nyilatkozatok*, 3 (p. 595). Zeneműkiadó.
- アツェール, ジュルジ (1982). 「コダーイのメッセージ」『KODALY ZOLTAN CENTURY IN JAPAN』日本コダーイ協会
- 岩井正浩(1991).『ハンガリーの音楽教育と日本－フォライ・カタリンとの対話より－』音楽之友社
- エルディ, ベーター (2002). 「序文」, 『合唱指導の出发点－小・中学校におけるポリフォニー・ハーモニー・形式の指導－』イルディコー, ヘルボイ・コチャール著・山岸徹訳, 音楽之友社, p. 5.
- 権藤敦子・高橋美智子・Fügedi János (2014). 「小学校音楽科における民俗音楽教材化の史的課題：ハンガリーの現在を参照して」『初等教育カリキュラム研究』第2号, pp. 23-34.
- 権藤敦子 (2015). 『高野辰之と唱歌の時代－日本の音楽文化と教育の接点を求めて－』東京堂出版
- 権藤敦子 (2019). 「学校教育と民俗音楽文化の関係性(2)」『広島大学大学院教育学研究科紀要第一部』第68号, pp. 49-56.
- 高橋美智子 (2013). 「コダーイ・ゾルターン音楽教育哲学の根本理念」『音楽教育学』第43巻第2号, pp. 75-78.
- 塚原康子 (2006). 「近代日本の音楽・芸能をめぐる文化政策」『東洋音楽研究』第71号, pp. 110-116.
- 徳丸吉彦 (2019). 「文化の実践と教育研究」日本音楽教育学会編『音楽教育研究ハンドブック』音楽之友社, pp. 50-51.
- 中川弘一郎編・訳 (1980). 『コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践－生きた音楽の共有をめざして－』全音楽譜出版社
- 羽仁協子 (1968.6-1969.9). 「コダーイの音楽教育観(第一回～終)」(15回連載)『音楽教育研究』NO. 26-39.
- フォライ, カタリン (1970/1975). 「私たちの音楽教育の基本原則と就学までのこどもの音楽的発達」『コダーイ・システムとは何か－ハンガリー音楽教育の理論と実践－』羽仁協子他訳, 全音楽譜出版社, pp. 1-35.
- 文部科学省(2018)『小学校学習指導要領解説 音楽編』東洋館出版社

【謝辞】

Fügedi János 氏に資料翻訳に際して多大なるお力添えをいただいたこと、心から感謝申し上げます。また、本研究は JSPS 科研費 22K02602 の助成を受けています。